



スローガンは「BE GLOCAL!」

地球規模の視野で考え、
地域視点で行動していきます。

Closeup Interview
クローズアップインタビュー

清川 晋氏

きよかわ すすむ

仙台商工会議所青年部 令和3年度会長

プロフィール

1978年生まれ。仙台市出身。2001年3月、東北学院大学経済学部経済学科を卒業後、上京。専門学校でIT全般と映像制作を2年間学ぶ。専門学校卒業後は映像製作会社に入社し、主にCM制作を担う。2008年1月、仙台に戻り、家業である仙台中央タクシー(株)に入社。2010年11月より同社取締役就任。2011年1月、仙台商工会議所青年部に入会。専務理事、筆頭副会長等を歴任し、2021年4月、仙台商工会議所青年部令和3年度会長に就任。

【概要】

仙台商工会議所青年部

令和3年度会長 清川 晋(仙台中央タクシー(株)取締役)

事業内容 45歳までの青年経済人が、自企業と地域経済の発展に寄与することを目的に、独自事業の企画・運営、会員限定のセミナーやワークショップ、全国の商工会議所青年部と連携したさまざまな活動などを行う。2021年5月27日現在の会員数は234人。

所在地 仙台市青葉区本町2-16-12
TEL 022-265-8127(仙台商工会議所青年部事務局)
HP <https://www.sendai-yeg.jp>

― はじめに、仙台商工会議所青年部(以下、仙台YEG)について、ご紹介ください。

仙台YEGは、仙台商工会議所内の青年経済人による組織です。私たちが目指すのは、会員間の交流を図り、各事業を通じての自己研さんによる資質の向上で、他の青年経済団体と異なり、会員間のビジネスが活発に行われている点が特徴です。

― 近年、特に力を入れている取り組みには、どのようなものがありますか。

大きく2つあります。1つ目は政策提言です。仙台YEGでは、2014年度から、メンバーと行政の方々が、ざつとばらんに地域の課題について話し合う「伊達な風会議」という事業を行ってきました。そこでの意見交換を経て、「仙台を、活力ある、経済的にも発展した魅力ある街にしていきたい」という思いから、2019年度より新たに「政策提言委員会」を発足させました。提言書は毎年、同委員会を中心に作成しており、2020年度に提言した内容は、「テレワークとワーケーションを活用した企業誘致」と「大型ビル整備と既存ビルの高機能化による街の活性化」の2点です。新型コロナウイルスの感染拡大により「経済活動が止まる」という未曾有の事態を経験したことを踏まえ、ニューノーマルに対応した要素を含んだ内容とし

ました。本年度も3回目となる提言を行う予定です。2つ目は学生向けの事業です。学生の皆さんに「地元にはユニークな技術やサービスを提供する企業がたくさんある」ということを知ってもらいたいと考え、2011年度から始めました。メンバーである企業の経営者らが直接、自社の特徴や経営、人材育成に対する思いを熱く語り、意見交換を行うといった内容です。開催方法も毎回工夫しており、実際にメンバーの企業を巡っていたりバスツアーや、昨年度はコロナ禍での新しい形として初めてリモートで開催もしました。学生からの反応も良く、訪問した企業に就職した方も出てきていますので、地元企業の雇用創出という面でも、とてもよい事業だと自負しています。

政策提言はもとより、 学生を対象に 魅力ある地元企業を 知ってもらう活動にも注力



鎌田会頭へ政策提言書を手交した際の様子(3月26日)。3回目となる提言書作成に向けて清川会長は「若手経済人ならではの柔軟な発想を盛り込み、提言内容をさらに磨き上げていきたい」と話す。

― 本業でも新たな取り組みを展開されていますが、ここにもYEGのメンバー同士のつながりが生かされていると伺いました。

私の本業は、仙台中央タクシーというタクシー会社で、前身のシミツタクシーから数えると今年で創業98年目になります。創業以来、「地域密着」を合言葉に、地域の公共交通の一翼を担ってきました。しかし近年、さまざまな要因により、タクシーを利用される方が減少してきています。さらに、人口減少等、今後の社会構造の変化を考えると、より付加価値の高い魅力的なサービスを検討していく必要がありました。そこで、弊社が着目したのが「インバウンド」でした。まずは、交流人口拡大のために、できることから実践しようということで、東北6県で同じ

課題を抱える仲間と「(一社)東北インアアウトバンド連合」という組織を立ち上げました。

その活動の中で実現したのが、2019年2月に開始した、東北初となるアメリカの配車大手のウーバー・テクノロジーとの提携による、専用アプリを通じたタクシー配車サービスです。世界で認知されているウーバーブランドで手配できれば、外国人の方にもタクシーを便利に使用していただけたと考えたのです。ウーバーとの提携は、元天童YEG会長で東北インアウトバンド連合理事の、DMC天童温泉の山口敦史社長から、当時のウーバージャパンの社長をご紹介いただき、東京でお話をさせていただく機会を設けていただいたのがきっかけでした。こうして縁もゆかりもなかったウーバーにつながることもできたのも、本を正せばYEGに入会したからこそ。YEGにおける私の大きな成功体験となりました。また、この取り組みは、全国規模の団体であるYEG独自のネットワークが、本業に還元できると示すことができた好事例だと自負しています。

もう1つは、仙台YEGのメンバー企業と連携し、昨年4月にタクシーを活用したフードデリバリーサービス「タクデリ」を始めたことです。発端は、飲食店を経営するハミングバード・インターナショナルの青木聡志社長の「タクシーで、うちの料理をデリバリーできないものだろう

か」という一言でした。既に他地域で実施しているタクシー会社があるということ、早速その会社に電話で問い合わせたところ、快く仕組みを教えていただけました。そこから一気に話を進めて、約3週間後にサービスを開始させ、現在も多くの方々に活用いただいています。この速さで実現できたのは、同じ志をもつメンバー同士だったからだと思います。もう一つの要因として、2020年度の「行動こそすべて」という仙台YEGの活動スローガンにとても感銘を受けて、「まず行動する」ということを意識していたのも大きかったですね。

― 仙台YEGに入会して良かった点、苦勞した点をお聞かせください。

私が入会したのは2011年1月で、その直後の3月に東日本大震災が起きました。あらゆることに不安を感じていた時、仙台YEGのグループメールでは、地域全体にとって必要な確度の高い情報が飛び交っていました。それを目の当たりにした私は、新入会員ながら、緊急事態に陥った時にグループに所属していることの大切さ、得られる安心感を強く感じました。以来、メンバーとしても、事業者としても、良かったことしか思いつきません。

先日開かれた仙台YEGの通常会員総会でも話したのですが、私は自分自身をYEGに入って成功した者だと思っています。人前で話したり、何かを表現したりすることを経験でき、自己研さんを積むことができましたし、経営者としてのあり方といった難しいことも、先輩方

Closeup Interview

「仙台YEGのメンバーだから、つながることができた」といえる人や企業、チャンスがある



― タクシー業界の今後についてお聞かせください。

タクシー業界は、これまでの遅れを取り戻すかのように、ここ数年で急激にIT化が進んでいます。ですので、この現状にいかに対応していくかが重要だと考えています。また、タクシー業界は「相乗り」や、需要と供給によって料金が変わる「ダイナミックプライシング」の導入など、改革が求められている業界でもあります。そこで、地方のタクシー会社を中心に、こうしたさまざまな改革を支援する「クロスタクシー」という組織を有志で

結成しました。次世代のタクシーサービスの開発から、将来の世代へつなげる社会活動などを創造していくことを志しています。1社ではできないことを複数社で考え、実現していくということ、YEGの考え方も共通する部分が多分にある組織です。

また、この春から「東北デスティネーションキャンペーン」がスタートしています。コロナ禍ということで、特別な活動を行うことができません。しかし、今後、観光には大いにチャンスがあると思っています。新型コロナウイルスが収束し



と話すことで自然に身についたことが多々ありました。信頼できる多くの仲間ができ、その結果、自社の事業にとってプラスになることもたくさんありました。

苦勞した点を強いて挙げるなら、私はお酒が飲めないので「飲み会への参加」が難しい。ただ、コロナ禍以前の会議終了後の懇親会は、必ず参加していました。多くのメンバーと交流をより深めることができ、学びにつながるお話を聞くこともできるのです。しかし、2次会、3次会ともなると、後日その話を覚えているのは、お酒が飲めない私だけということもあります(笑)。

て、気軽に旅行が楽しめるようになれば、これまで抑えていた反動で国内観光が活発になるでしょう。その要望に応えられるよう、個人や少人数での観光に対応したジャンボタクシーなど、先を見据えて準備を行っていきます。

― 最後に仙台YEG会長としての今後の抱負をお聞かせください。

本年度の活動スローガンは「BEG LOCAL(ビー グローカル)」。地域を愛する気持ちが世界に繋がる」としています。「GLOBAL」とは、「ローカル」地方の「グローバル」世界的な」を合わせた造語で、「地球規模の視野でものごとを考えつつ、地域視点で行動しよう」という意味です。地方都市でもITを活用してさまざまなことが実現できる今だからこそ、地域事業者として新しいことにチャレンジし、その過程や結果を発信することで、世界に展開していく流れもあると確信しています。そして、このスローガンに沿った活動を行う上で、「発信」と「連携」に特に力を入れていきたいと思っています。

来年は仙台YEGの創立20周年に当たる年です。歴史や多くの方の思いが詰まり、重みが増したバトンを受け取りましたので、志や熱い思いを持つ層をさらに厚くして、次世代にしっかりとつないでいきたいと思います。



写真上：通常会員総会で、本年度のスローガンに込めた思いや意気込みを語る清川会長(4月27日)。「コロナ禍での新たな形を模索しながら、どのような状況でも歩みを止めることなく、グローバルな視点を持って活動していきたい」と本年度の活動への協力を呼び掛けた。

写真下：令和3年度仙台YEGスローガン

― 清川会長にとっての息抜きとは。

家族と過ごす時間ですね。子どもが3人いるのですが、長男が中学校1年生で、昨年までは少年野球チームで活動しており、休日はその活動に付きっきりでした。私自身、中学・高校と野球をしていたので、それから応援することが楽しくて仕方ありません。しかし、今年、長男が中学生になったのを契機に、これからは2番目、学んだりしたいと思っています。これまで趣味といえるものをもたなかった私ですが、これからは「子どもたちの習いごと」を趣味にしていきたいと思っています。

より良い環境をめざす。

青葉環境保全 AOBA

〒984-0037 仙台市若林区蒲町19-1 TEL 022(286)3161(代)